

ささえあう

2010年
12月15日
第13号

事務局 大分市大字森679-6 リフォーム夢舎内 TEL・FAX097-527-5443

地域包括支援センターって なあに？

地域包括支援センターは高齢者のための総合相談窓口です。介護保険のサービスや保健・医療・福祉サービス、サロン等の地域住民による活動が適切に利用できるよう支援しています。

「住みなれた地域で安心して暮せる」ように、地域や医療・福祉等の関係機関と連携し、支えあうためのネットワークを構築することが大き



地域の人たちと一緒に座談会や勉強会を開催

住み慣れた地域で暮らしていくために 働き盛り世代の認知症 — 就労を含む支援が課題

大分市 城東地域包括支援センター 友 昌世

な役割です。また、介護保険の申請手続きや要支援の方の予防プランを作成しています。地域包括支援センターができて今年で5年目になりますが、相談を受ける中で増加しているのが認知症の問題です。認知症の方が増加するに伴い、悪徳商法や虐待等の権利擁護に関する相談も増加しています。

大分市には地域包括支援センターが17ヶ所設置されていますが、城東地域包括支援センターでは「認知症の方がいかに地域で安心して暮らせるか」、言い換えれば「自分が認知症になっても住み慣れた地域で暮らせるにはどのような仕組みがあればよいか」をテーマに地域の方と「座談会」や、認知症の方を介護しているご家族や施設職員、ケアマネジャーや地域の方と一緒に勉強会を開催しています。また、城東圏域認知症ネットワーク会議を開催し、仕組みをつくるための検討を行っています。

認知症は高齢者に多く現れますが、18歳の症例もあるようです。64歳までの方に発症する認知症を若年性認知症として扱っていますが、今、働き盛りの世代に認知症という病気が深刻な影を落としています。子供たちを学校にやりながら家のローンを払っている年代の方が認知症により働けなくなったりするケースがあるようです。今後増えるであろう若年性認知症の方の、就労を含む支援体制をどのように作っていくかを課題に、大分精神障害者就労推進ネットワークに参加させていただいているところです。

「ささえあい」の大切さ

高齢者の認知症の問題に関わるようになって、一層「ささえあい」がどれほど大切で、どれほどありがたいものかと思えます。トラブル

を起こされ「施設にいれよ！」と言いながらも「近所だから。」とお世話をしてくださるおばあさん。「どしたんな？どっか行くんな？」と声をかけながら自宅に連れて行ってくれるおじいさん。等等・・・。

人はひとりでは生きていけないもの。人と人とが関わることで道も開け、生きる手立ても見つかるもの。だからこそ、「ささえあう」ネットワークが必要です。

だれもが安心して 暮らせる地域へ

「ネットワーク」と言ってもすぐにできるものではありません。でもそんなに難しいものでもありません。「おはようございます。」「こんにちは。」の日頃のあいさつ。「ありがとうござ

います。」の感謝のことば。そして「お互い様」のこころ。この3つが溢れている地域であれば、障がいがあろうと、認知症であろうと、高齢者であろうと安心して暮らせるのではないのでしょうか。ただし、安心して暮らせる地域はただ待っていても出来ません。行動しなければ動きません。「職をもって自立する」その思いを実現するためにも、まずは自分ができることを人のために役立ててみてはいかがでしょうか。

城東地域包括支援センター

大分市大津町2丁目1番41号
大分県総合社会福祉会館 1階
電話 097-558-6285

精神障がい者の家族の言葉から 親・家族に負担がかかりすぎる現実

精神障がい者の就労は、本人と社会だけでなく、先が見えない現実をひたすら担い続けている家族にとっても重要なことです。家族の方々の切実な声を聞かせていただく機会がありました。心の病を家庭内だけで抱え解決することは非常に困難です。地域で支援を充実して、生活の場や就労の可能性を広げていかなければ、再発を防ぐことは難しいと感じました。

10代で発病、今50代。よくなる。あきらめに似た気持ち。親が先に逝ったあと残していかれんと思う。

学生の頃発病。精神科に行ったが、本人は「薬を飲む病気じゃない」とクスリを捨てた。大学に行き、就職したが続かず、家に帰らせた。仕事に就いても休む。今、入院している。「親亡き後」を考えると言いようがない。

学生時代に発病。10数年前、統合失調症と診断された。今、就労移行でやっているがうまくいかない。まじめすぎるくらいまじめ。仕事にも集中し過ぎて眠れなくなり、翌日に影響する。

20代で発病。就労していた。「なまけ病」と本人を責めた。それから数年、就労移行で時給631円で働いている。なだめたり怒ったり、家族の葛藤も大きい。

地域の現実排除の方向。散歩しても警察から何度も止められ、レッテルを貼られた。

大学の時に発病し30年になる。年とともに退院しても悪くなりやすい。先のことが心配だが、グループホームができればと思う。

「この子さえいなければ」と思うことも、「ただの怠けじゃない」と思うこともある。台風が過ぎるまでと思うが、他の兄弟との調整も大変。つらくて死にたいと思うこともある。

2月 - 国東・竹田・別府でフォーラム・セミナー開催

●精神障がいがある人とみんなの国東フォーラム

テーマは「理解があれば生きられる 支援があれば働ける」。家族会や福祉事業所、市、保健所、自治会、民生委員会、商工会、漁協などが協力して開催されます。内容は、①当事者、家族の話 ②ハンドベル演奏③パネルディスカッション。

- 1) 開催日時 2月4日(金) 13時30分
- 2) 開催場所 国東市 武蔵町保健センター

●第3回 精神障がい者の地域生活と就労を考える竹田フォーラム

家族・当事者は「抱え込んでいる」、周囲は知らないから「こわい」「どう対応するかわからない」—こんな現実に、正しい情報を提供し、交流の機会をつくろうと開かれます。事例の報告やシンポジウムが予定されています。福祉・保健・医療関係者や市、市民でつくる実行委員会主催。

- 1) 開催日時 2月14日(月) 13時30分
- 2) 開催場所 竹田市総合社会福祉センター 多目的ホール

●働く精神障害者からのメッセージ発信事業九州ブロック大分セミナー(案)

全国精神障害者就労支援事業所連合会からの要請を受けて、各方面と協力しながら開催したいと考えています。最新の行政の考え方と全国の取り組み状況を知るとともに、大分における交流の広がり発展をめざします。

- 1) 開催日時 2月26日(土) 午後1時~5時
- 2) 開催場所 別府亀の井ホテル 大ホール

プログラム(案)

- 基調報告 ○行政報告(厚生労働省)
- 経験交流会 大場製作所 別府市の事業所 大分市の事業所
- シンポジウム 当事者 事業主 就労・生活支援者 行政関係 等

社会福祉法人
そよかぜ



ふれあいステーション ひので

就労継続支援B型・就労移行支援事業所

“心の居場所”・“自分の仕事”を見つけるために



●自分の心の収まり場を見つけることから始めます ●「何が自分のする仕事なのか」を見つけたとき、喜びを持って毎日暮らしていけます ●自分の力で安定したものを見つけることによって一般社会に場所を変えても生きていける。そう思いながら支援しています。

「人とつながりとか人を大事にする気持ちがわいてくるところです」(利用者の言葉)

速見郡日出町字仁王山3531-24 TEL 0977-73-1326 FAX 0977-76-7555 メールhinode@po.d-b.ne.jp

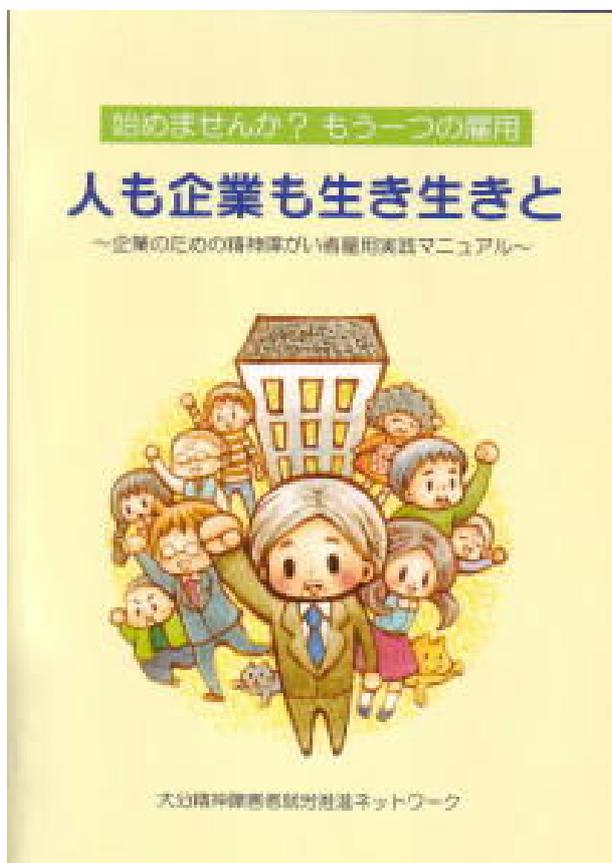
就労支援の場の思いが形に — 企業で、事業所 etc.で活用を！

“企業向けマニュアル”が完成

「始めませんか？もう一つの雇用～人も企業も生き生きと」

ネットワークの今年度の中心的な取り組みの一つ、「企業向けマニュアル」が完成しました。書名は「始めませんか？もう一つの雇用 — 人も企業も生き生きと」。大分で実際に精神障がい者の就労を支援している人たちが、経験をもとに「理解と支援」のための実際的なノウハウをまとめたものです（右に目次を掲載）。

内容は4部構成になっており、第1部では、雇用している企業の声や働いている仕事内容を紹介し、就労に向けて欠かせない準備や配慮することなどを掲載しています。第2部は職場でどのようなケースにどう対応するかの事例や、就労事例を紹介しています。第3部は就労支援の制度や支援機関、第4部は資料編として保健・医療機関や助成金制度、用語や病気の解説などを掲載しています。



B5版68ページで、雇用支援機関などを通して配布をしています。

ご希望の方は、ネットワークに直接申し込んでいただければ郵送します。（送料210円）

目次を掲載します。

第1部 精神障がい者雇用を進めるために

I 雇用の現状と雇用企業の声

- 1, 大分県内の精神障がい者雇用の現状
- 2, 雇用企業の声

II どんな仕事ができるのですか？

実際に働いている職場一覧

★みんなと同等に働けるのですか★

III 就労への準備 16

IV 「精神病って？精神障がい者って？」

病名にかかわらず共通する基本姿勢

V 精神障がいのある方の家族との接し方

VI 精神障がい者雇用上の配慮・留意事項

第2部 雇用している職場の対応事例

雇用している職場の対応事例 Q&A

就労事例

Aさん（男性・27歳・うつ病）の場合

第3部 企業への支援

就労支援の制度

トライアル雇用・ジョブコーチ 他
就職に向けての準備・訓練（委託訓練）
障害者の雇用に関するノウハウの提供
就労を支援する専門機関

第4部 資料編

助成制度

精神障がいに関する専門機関・支援事業所
等

医療機関

制度・用語解説

“マニュアル”生き生き活用法!!

「こんな仕事ができます」・「ジョブコーチ・トライアル雇用も」・「困ったときにはこうすれば」

企業にとってプラスは…

今回発行した「始めませんか？もう一つの雇用 — 人も企業も生き生きと」は、「企業のための精神障がい者雇用実践マニュアル」という副題が付けられています。企業の方に読んでいただき、精神障がい者の採用と継続就労への支援に役立てていただくことが一番大きな目的です。それもただ手渡すだけでなく、ポイントを話しながら、関心を引き起こすことが大切です。ポイントは、企業にとってプラスになる点。

- ①企業の社会的貢献になる
- ②法定雇用率の達成につながる
- ③あたたかな職場づくりにつながる
- ④様々な支援や助成の制度を活用できる

などです。

具体的な対応方法を掲載していることも伝え、不安を軽減できることでしょう。

支援者、当事者・家族には…

このマニュアルは、企業の方だけでなく、支援に従事されている方、これから支援に関わる方ご自身にとっても活用できます。内容がとても具体的だからです。実際に働いている職種、支援方法、受け入れ体制づくり、職場での対応事例、大分県内の関係機関など役に立つ情報が詰まっています。

また、当事者や家族の方にとっても、企業がどのように考えているのか、就労する場合に何が求められるのか、どのような支援が受けられるのかなど、就労する際に必要な情報を得ることができます。

こんなに具体的…

近年新たに精神障害者が働くことが増えた職務

Q 一般事務関係ではどんな職務？

A 企業の総務部、人事部、経理部、営業部等での勤務があります

Q ロジスティック関係ではどんな職務？

A 物流センター、倉庫などがあります

Q 卸売・小売業関係ではどんな職務？

A スーパーマーケット、ホームセンター、衣料品、スポーツ用品店などがあります

Q 介護・看護・保育関係ではどんな職務？

A 老人ホーム、病院、保育所などがあります

Q 農業が向いているという声も聞きますが？

A 農業生産法人等で働いています



事務・経理等



卸・小売業等



物流・倉庫等



老人ホーム・病院等

どうつなぐ当事者・家族-医療-地域

別府大学が「医療福祉サービスの地域連携を考えるフォーラム」を開催

家族会-精神科病院-行政が率直に意見交換

ネットワークが発足して4年半、就労や生活を支援していくなかで、「地域で社会資源をつなぐ役割」の重要性が明らかになってきました。地域のサービスの存在を知らせ、制度の意義を伝え、実際に利用するまでにつなげていく存在なしに、地域の暮らしは成り立ちにくいのです。この点に焦点をあてた「精神障がい者のための医療福祉サービスの地域連携を考えるフォーラム」が、別府大学の主催で11月20日にビーコンプラザ国際会議室で開かれました。内容の一部を紹介します。



地域の様々な問題、解決の糸口は人々の中に

コーディネーター 篠藤明德・別府大学文学部人間関係学科学科長

地域は様々な課題を抱えている。代表制民主主義は限界を指摘されているが、解決の糸口は人々の中にあるのではないかと。市民の思い、市民の力が出てくる取り組みが求められ、「市民討議」などの取り組みが日本でも広がり始めている。私は精神障がいについては素人だが、素人の関わりも重要だと考えている。今日は、素人として、また社会の一人として関わっていきたい。

パネリストの発言（要約）

地域医療の立場から

頑張る民間精神科病院-地域の受け入れ体制づくりが課題

鶴見台病院 山本 紘世 院長

「精神障がい者を地域に」というのは世界的な流れだ。日本も「入院から地域へ」ということになっており、それは止まらない。大分県の現状は、病床数は5365床で、基準を1000床オーバーしているが、病床利用率は下がっている。平均在院日数は全国平均より100日近く多い。新しい患者はどんどん退院していくが、長期入院の人が多い。（新規患者85%、長期入院者10%程度）。現在入院している人の中で、受け入れ条件が整えば退院可能な人の割合は3.7%。課題は、どう退院させるか、そして地域でどう受け入れの体制をつくるかにある。

「ベッド半減」と政府は言うが、よほど地域支援を充実しなければ対応できなくなってくる。現政権の政策は、担うもの抜きにユーザーたちで制度づくりをやっているのではないかと。地域サポー

トをつくる場合に、コーディネーターをどこに置くのかが問題になる。イギリスは病院内にセンターを置いている。また、お金をどうするか。保険でカバーされていないのが現実だ。課題が非常に多い。民間病院が頑張っているのが日本のいいところなので、それをどう有効に活かすかが大切ではないか。精神障がいに対する啓発も少ない。どうやって啓発し偏見をなくしていくかも重要だ。

行政の立場から

遅れている精神障がい施策—重要な地域生活支援

大分県障害福祉課 四ツ谷年晴 課長

大分県の精神障がい者は、入院が4937人、通院が2万8617人、合わせると3万3554人になる。精神保健福祉手帳は取得が進んでおらず4798人となっている。県としては「三つのチャレンジ」を掲げて精神障がい施策を進めているが、また不十分であり、身体障がいより知的障がいの方が10年遅れ、精神障がいは30年遅れていると言われる。普段、精神障がい者に接することがないため誤解や偏見が強く、無理解が問題だ。理解の促進を進めたい。

地域生活支援においては、①退院促進②居住の場の確保③相談支援体制の充実④緊急の対応⑤就労支援⑥理解の促進—が必要だと考えている。就労においては今年11月から県庁で2人の実習を受け入れ、来年4月に非常勤職員として採用するなどの取り組みを進めている。相談支援機関は県内に40数カ所あり、研修もしているが、十分知られていないので、周知する必要がある。医療面では、オーバーベッドなどの事情で県立入院施設がないが、「措置入院」への対応は指定病院で行っている。夜間・休日への対応はできていないので、できるだけ早く取り組みたいと考えている。

当事者・家族の立場から

緊急対応・訪問支援を—地域の受け入れが回復につながる

大分県精神障害者福祉会連合会 藤波 志郎 会長

家族は、子どもが発症したときの気持ちは一生忘れない。精神障がいの知識や情報を全く持っていない。そのようなときに突然発症する。「自分の子どもがまさか」と受け入れることもできないまま、「これからどうしようか」と途方に暮れる。親も子も何もわからないまま苦しむのが現状だ。うつ病を入れると国民5人に1人が心の病になるというデータもある。まず、みんなが精神障がいについて知識を持つことが必要だ。

二つ目は、本人の病状が急に悪化したとき、親は収めることができず、いろんな所に緊急の対応をお願いをするがなかなか受け入れてもらえない。夜寝ずに陰で見ているしかない。緊急時に対応してもらえる応急入院病院が地域にほしい。公立の精神科病院も必要だ。

三つ目、家族への支援も含めた訪問支援チームができないだろうか。すでに全国数カ所で実施され、医師、看護師、精神保健福祉士などの多職種チームが作られ、24時間の支援を行っているところもある。大分でもぜひ実現してほしい。「夜の一番苦しいとき」に相談できる場所が必要だ。すべて病院が背負うべきだということではない。他県ではグループホームや社会福祉法人で対応するところも出てきている。そういう所がほしい。

当事者には「働きたい」という気持ちを持っている人が多い。受け入れてくれる職場が増えるよ

うに頑張っている。医療、行政、福祉が連携できれば、地域福祉は実現できると思う。

別府大学文学部人間関係学科

地域で人と社会資源をつなぐ存在が課題

三城 大介 准教授

今なお、地域で暮らすための支援が乏しいというのが現実だ。私はネットワークづくりに関わってきたが、最初に行った調査で、「社会資源の利用が少ない」という現実と直面した。精神障がい者と家族の願いをキャッチアップし、社会資源を連携させ、支援を形づくる地域のコーディネーターの重要性が浮かび上がってきた。そのためには、福祉ネットワークだけでなく地域ネットワーク（自治会・民生委員など）との連携が必要になる。福祉、保険、医療等の資源だけでなく、地域全体を視野に入れた社会資源をコーディネートする役割を果たせる存在が、地域精神保健福祉の重要な課題になっていると思う。

さらに、福祉から地域の再生に取り組むことができる。竹田では高齢化したカボス農家を障がい者が支え、大分市の団地では「朝市」で高齢者を支え、ハートブリッジでは介護の仕事に精神障がい者が働いている。モデルをつくり、情報を共有し、広げていくことが必要だ。そのためには医療と行政、福祉が連携したバックアップが欠かせない。地域にプランメーカーがいて、福祉・医療と地域をつなぎ、市民と関係機関や行政が協力することで、地域の理解と支援も広がってくる。

コーディネーターのまとめ

篠藤明德・別府大学文学部人間関係学科学科長

今日は、それぞれ課題を抱えながら、一緒に話し合う機会が非常に少なかった方々からお話を伺い、意見交換をしていただいた。すぐに結論は出なかったが、これからも一緒に考えていくための“キックオフ”として意義があったと思う。このような社会的なテーマを取り上げて公開の議論を行うことは、大学が寄与すべき重要な役割ではないかと考えている。

（発言内容は要約しています。文責・編集部）

編集後記

別府大学のフォーラムで、退職されている秋田先生が会場から発言された。「学生たちに『ソーシャルワークは社会改良運動』だと言い続けてきた。地域の運動として精神医療を考えると、健常者が関わる意義が見えてくる。私たち自身の生き方の問題として、また地域のあり方の問題として関わるのが重要ではないか」。ネットワークの積み上げのなかで、私たちが感じてきたことにそのままつながる言葉のように思えた◆先日、大分市内の約60病院のワーカーが参加している大分市医療実務者連携協議会に参加させていただき、会報「ささえあう」や「企業向けマニュアル」の配布と活用についてお願いした。終了後、多くのワーカーから声をかけられ、各病院に精神障がいの方が入院することもあり、情報が必要とのお話をいただいた。よりよい医療のために取り組む人々には、よりよい福祉の情報も必要なのだと実感◆このようなつながりが広がることのひとつひとつが“社会改良”であり、“地域のあり方”であり、それは詰まるところ“私たち自身の生き方”に関わる問題なのではないだろうか。と、少し立派なことをつぶやきながら、今年も終わりそうです。ご愛読に感謝申し上げますとともに、来年もよろしくお願いたします。(〇)